

國字國語改良問題に對する管見

木下 李太郎

今夕は入澤先生始め先輩の方々、並に同僚諸君のお集まりの席に招かれまして、國語國字改良問題に關して何か申上げる様に御指圖を受けましたが、洵に光榮に存じますと同時に、甚だ恐縮にもまた氣味悪くも感ずる次第でございます。國語協會は日本語を好くし、美しくする爲めに長年盡力なきつて居るさうで蔭ながら尊敬を拂つて居ります。わたくしは田舎に居りましたので、どういふ事を此協會がなきつてゐるか残念乍らよく知りません。殊に特別の問題として、醫學上の用語に關してはわたくしは何も考へて居りませんので申上げ兼ねますが、唯昨年の秋頃必要があつて國語國字の問題を少しばかり調べた事がありますので、一般問題でありますが、少しその事を申上げたいと存じます。

わたくしが此の問題について少しく注意をし、そして達した結論は——結論といふの

は少し烏滸がましいのですが——それはどういふ事かと云ふと、著しく保守的傾向になつたことであります。自分では論理的であると信ずる考へ方を進めた所がさういふ所に參りました。事によると皆様の御意に慚はないかも知れぬと思ひ、今夕は御批判を仰ぐ爲めに謂はばこの被告席へ着いたのであります。

國字、國語の問題は、實は立場の如何に依つて非常に異つた結論になるのであります、十年以來の學士會月報などに現はれる諸君の御意見を伺ふと、多くは能率主義の上に立つた考へ方であります。わたくしが今夕申上げたいと思ふのは國字、國語の問題を考究する立場は、ただ能率主義に盡きるものか、或は別に他の見方がありますか、といふ事でありませう。先づ初めに、少し乾燥無味になる恐がありますが、そして又皆様の疾うに御存知の事であり、それを繰返すのは御迷惑でありませうが、國字、或は國語の改良の運動の沿革を簡単に述べさせて頂きます。

この問題は随分古い歴史を持つてゐるのであります。既に文久末年即ち一八五六年に前島密氏が「漢字御廢止之儀」といふ一文を草し長崎の瓜生寅氏、何禮之氏、青江秀氏、鹿兒島の重野安繹氏などに相談したといふことがあります。慶應二年には開成所頭取松本壽太夫氏を介して之を慶喜公に上り、明治五年には「國文教育の儀に付建議」及

び「廢漢字私見」を集議院に提出したことがあります。明治五年には文部卿大木喬任氏が漢字の數を減ずるの意が有つて田中義廉、大槻修三、久保吉人、小澤圭次郎の諸氏に命じて新撰字書を編輯せしめ、明治六年には前島密氏が「學制御施行に先ち國字改良相成度卑見内申書」を右大臣岩倉具視公に上つて居り、又西周氏は「洋字を以て國語を寫するの論」と題しロオマ字論を主張しました。他は略すとして、先づ是等が國字國語の改良論の先驅だつたと考へられます。

此間に在つて今に傳へられてゐる有名な話は明治五年、當時アメリカ公使をしていらつしやつた森有禮氏が、泰西文物を輸入せんとするには言語を改むるを以て先決の事となすといふ考から一種の新英語を改定し之を日本に移して新國語とするがよいといふ意見をパンフレットとして識者に配つたといふ事であります。所がエエル大學教授 W.D. Whitney 氏の如きは同年六月、森有禮氏に書を送り其意見の不可なるを諭したといふ有名なエピソッドがあります。尤も英語を日本國語とするといふのは今でこそをかしいのですが、當時に於ては決してそんなに破天荒の事ではないのであります。明治十八年高田早苗氏も英語を以て日本國語とすべしといふ説を樹てて居ります。又噂に聞く所では末松謙澄氏も同じ考をその亡くなる時まで持つてゐたといふことであります。明治二十年には、肥塚龍氏は「日本に第二の日本語を作るべし」といふ題で、世

界に雄飛せんと欲すれば、英語またはフランス語を採用して之を第二の國語にするのがいいといふ議論をしました。肥塚氏の考は、今日フィリッピン、シヤム、また支那に於いて實現せられて居りますが、果してそれがよかつたかといふ事を考へると、どうも今昔の感に堪へぬものがあります。而も森有禮氏、高田早苗氏、肥塚龍氏の理想は——形は變つて居るが依然として今日國內に存してゐるのあつて、その一例としては大正三年時枝誠之氏の「Neo Japanese」の提唱が有ります。これは假名まじり文を用ひて漢字の代りに英語を入れるといふ議論であります。又第二の例は——或はかう申すとお腹立の方も有るかも知れないと存じ恐縮であります——それはロオマ字を以て國字となすべしといふ議論であります。この議論は、その表面上の理由と、その深奥の傾向とがかなり違つたものを持つて居ります。その表面上の理由は所謂能率主義であります、その深奥の傾向は何かといふと畢竟するに牛を馬に乗換へる。漢學的古典の牛を現在外國語の馬に乗り換へるといふ要求であらうと思ひます。詮じつめて見れば森氏、肥塚氏の理想と同じ方角に在るものであります。この事に就いては後に時間が餘りましたならもう一度申上げます。

尙ほ、その他にカナモジ會や、ロオマ字會の活動があり、假名遣改定案、漢字制限案があり、又最近文部省はロオマ字の形式を統一しようといふ案を決して居りますなどい

ろいろの研究、吟味に價するものもありますが、それらの事は省略します。

今迄に行はれてゐる國字、國語改良運動の精神の概要を申上げようと思ひます。

この運動の根本義は、古來用ゐてゐる漢字……従つて日本語の中に混つてゐる漢語——漢語といふと語弊があるから假に漢系語と申しますが……この漢字、漢系語は多くの弊害を持つてゐるといふ事が、先づ第一の問題とされて居ります。十年來、或はもつとになりますか、學士會月報あたりには毎月多數の之に關する議論が出ますが、それらを改めて見るとさう甚だ多くの根據があるのではなくて、疾くの昔から唱へられた範疇のものであります。それを分けて見ると大體かういふ事になるのではないかと思ひます。

先づ第一が「字體の錯雜」(是れは井上哲次郎先生が用ゐられた言葉であります)、第二が、字音の錯雜(同)、第三が「字訓の錯雜」(同)、第四が字數の多い事(中田秀穂氏)、第五は文語と口語と背馳を來す事(是れは帝國協會の明治三十三年の建議書の中に見えて居ます)、第六が學習の困難(同)、第七は比較的最近の論であります、タイプライター印刷に於ける不便(尤も是れも古くは既に朝比奈知泉氏が説いて居ります)、第八は印刷上の不便、第九は毛色が少し變つてゐますが、漢語は外國語であるといふ説

であつて、福永恭助氏の説く所です。第十には「漢字は東洋の一部の文字に過ぎずといふこと」、第十一は「漢字は支那文明の所産を傳ふるに過ぎずと云ふこと」、是等は建部遯吾氏の議論に引用してあります。第十二は「我國民が漢字を採用し之を便とするは國語の發達上甚だしく妨げあり」（井上哲次郎氏）、第十三に民族勢力發展上悪影響がある（同）。第十四「漢字漢文と云へる貴族制度」是れは前島密氏の説でありますが、此の説は頗る多く今いふデモクラシイの思想から發してゐる言葉であります。或は他にもつとあるかも知れませんが、今まで諸家によつて述べられた漢字漢系語の弊害の説の根據はぎつとさういふ範圍に包括されると思ひます。近頃になつてただ實例が段々巧みになり廣くなり、例へばイギリスの小學校に於て子供の國語學習の時間が日本に較べて甚だ少いとか、三井物産に於て實驗した假名書きの「タイプライタア」は、かなりの好い能率を擧げるなどと云つた事であります。孰れにしても其の根本義に於ては、以上の範疇の中に含まれまして、畢竟するに、能率主義、純粹國語哺育論、國勢論乃至デモクラシイの思想——かう云ふやうな立場に在る主張の集まつたものであります。それに反して國民、殊に兒童青年の精神の啓發、國民道德の鍛練、人道（ヒュマニテイの意味に使つて居りますが）、その實行の上に良いにもせよ悪いにもせよ、漢字及び漢系語がどういふ影響を與へてゐるかといふ事については現在に於てはあまり議論せられてゐな

い様であります。

次には、然らばどういふ改良策が案出されたかを申し上げ、私の考を少し述べて見たいと思ひます。改良策としての第一は、漢字制限論、並に字畫の省略附假名遣の改定、それが一つの系統であります。第二は假名文字案、第三、ロオマ字案、第四、速記文字改良使用案、第五は新國字制定案の五つに總括され得ると思ひます。第一の漢字制限の事は、只今申上げた通り明治五年、大木喬任氏が之を企て、また矢野文雄氏の如きも、これを三千字に限らうと試みたことがありました。併し漢字を用ゐる以上は甚だ窮屈を覺えたのであります（朝比奈泉氏明治三十三年）。其他福地源一郎氏、三宅雄二郎氏などもこの種の意見を發表して居ります。御存知の通り、大正十三年十二月に臨時國語調査會は常用漢字を千九百六十字に定め、これを發表し、各新聞社も大體これに従つて新聞を作りました。同時に略字を標準字として、當時報知新聞の如きは率先して略字を用ゐました。現在でも東京醫學會雜誌は略字を使つて居ります。所が近頃になり、新聞の常用の漢字がずんずん殖えて來ました。殊に新聞小説などにもむづかしい漢字を餘計に用ゐ出したといふ不平が出て參りましたし、又最近支那事件が起りましたから、漢字は更に増し恐らく千九百字位ではあるまいと思ひます。かういふ様に、漢字を使用してゐては、人工的の制限は甚だ困難であり、また或程度までは寧ろ不可能なこと

であると思はれるのであります。

次には假名國字論はどうかと云ひますと、その昔カナモジ會など色々活動しましたが、近頃は火の消えた様な状態であります。此事は何もカナモジ會を俟つ迄もなく、我々國民は既に平安朝時代に經驗して居ります。御存知の通り日本人はかなり實際的の國民でありますから、若し實際に叶つた便利なことであればあまり體裁などには構はないのですが、平安朝時代に榮えた女流文學の假名がきの小説、日記の類が、いつの間にか廢つてしまつたといふのは既に先人も注意してゐるやうに、何も女の文學で莊重でないといふことばかりでなく、やはり假名書きが不便で實用に適しなかつた故であります。それから速記文字を改良して國字にするといふ議論がありますが、これは既に井上哲次郎氏が述べて居られます。併し井上さんの意見は随分變つて、後には新國字を創製するのがよいといふこともいつて居ります。實際又幾種かの新國字は工夫せられて居ます。その方の沿革はまだよく調べて居りませんが、これは實行の一番むづかしい案では無いかと考へて居ります。

そこで、一番問題になるのは何といつても口オマ字論であると思ひます。漢字制限の案とか、字畫を少なくする案とか、或は文語を排斥して口語にする案とか、眼に訴へ

る言葉を止めて耳に訴へる言葉にする案等がありますが、畢竟それらはロオマ字に行く前提と私は考へて居ります。で、今夕は専らロオマ字論について私の考へてゐる事を申上げて見たいのであります。

ですが其前に、今云つたやうにいろいろの案にも反對者が無くは無かつたことを一寸附加へて置きたいと思ひます。少し舊いところでは、西村茂樹、金子堅太郎、加藤巖夫、井上圓了の諸氏であります。就中、西村氏の如き大に傾聽すべき意見を述べて居ります。岩波文庫中の「日本道徳論」の如きは今でも一讀する價値があります。さてロオマ字論について申上げる順になりましたが、時間を節約する爲めに唯結論だけを言つて見ます。

第一には、ロオマ字主義は主として功利主義、或は能率主義の上に立つ議論であると申したい。そしてこの功利主義、能率主義はロオマ字論者からは既に批評を超越した原則として取扱はれ、その原則には議論の餘地が無いかの如く考へられてゐるやうであります。また其反對者に於ても餘り此立脚地に對する批評はして居ません、然しそれが果して批評を容れない、既に決定した先決問題と見做して可いものであらうかどうかと云ふと、其事は大に吟味して見なければならぬのであります。能率主義の後に、もつと基礎の廣い根據が控へて居るのではないか、と疑ふ事が出來ます。能率といふ言葉は恐

らく機械工業の言葉から出たものであらうと思ひますが、成る可く勞力、費用を少くして、大きい効果を上げるといふ事であり、人間にも機械的の方面が多にありまますから、或る程度までは無論それを當嵌める事が出來ます。然し機械に適用すべき事を、すっかりそのまま人間に應用し得るかといふと、それは大いに疑問としなければなりません。然るに能率的に物を考へる人は機械に於ける能率論と人生に於ける——ヒュマニテイに於ける——人間の活動の原則とを全く同一に見做す様な傾向があります。だから先に一寸申しましたが能率論の後に更に大きな一つの根據があるといふことを申したい。日本語でいふより西洋の言葉を借りて言つた方が明瞭ですが、それは別ではない、ヒュマニテイであります。尤も總ての言葉は歴史を持つてゐまして我邦で用ゐる人道主義或はヒュマニズムといふ言葉はアメリカのキリスト教徒の用ゐるやうな意味で専ら用ゐられてゐるのでありますが、それと、歐羅巴で用ゐるものとは少し違つてゐるやうであります。わたくしは寧ろ歐羅巴的の意味に於てヒュマニテイ、或はヒュマニズムといふ言葉を用ゐるのであります。さう云ふものに就いて今ここで烏滸がましくも長々と申上げる事もないと思ひまして、唯便利であるから此の言葉を用ゐ、且つ其意味を少し擴げ、假に西洋のヒュマニテイ及び東洋のヒュマニテイと分けて申上げませう。東洋の道德とか、東洋の文化とかいふ事よりも、東洋のヒュマニテイと云つた方が今の状態

に於ては一層適切に感ぜられると思ひます。また其上に、假に古典的のヒュマニテイとモダンのヒュマニテイ乃至自然科學的ヒュマニテイとかう云ふ風に分けて用ゐて見ませう。かくは分けて見ますものの、ヒュマニスムといふものは、其本來の性質から絶對に「過去」を必要とするものであります。別言すれば歴史主義、古典主義無しのヒュマニテイといふものは考へられないのであります。假にクラシツクのヒュマニスムに對してモダンのヒュマニスム、自然科學的ヒュマニスムといふことを對立させて見ましても、孰れのヒュマニスムにしても、自然科學や法律學の思想を唯當座の實用の範圍内で使役するだけの事の名稱では無いのであります。やはり多かれ少かれ古學の助を必要としてゐるものであります。第一恐らくかう云ふ風にヒュマニスムを對立せしめると云ふ事が間違ひであります。それはとも角、人間の行爲の標準となるものはヒュマニスムでありまして、それをどう云ふ風に解釋すべきか、若しそれに今申したやうな差別が有るとすると、其どう云ふ取り合せが最も今の世に適當するかと云ふやうな問題は、歐米に於ても、常に攻究せられて居るのであります、この點大に我々の參考にもなるのであります。フランスあたりでも近年屢々此の問題は社會に於て、議會に於て、また學界に於て議論せられ、わたくしは一九二二年―三年に巴里に居りましたが、其頃日々の新聞紙上でも問題となりました。其後、其頃の官報を買ひ集めて讀んで見ると甚だ興

味があり、それ以來わたくしはそれを機縁として日本に於ける國字國語の問題を考へて見たことがあります。ここに持つてまゐりましたのはフランス議會に於ける此問題の討論の抄録であります（「フランスに於ける教育改革」「文化」、昭和十二年四月號）。

獨逸に於てはどうかといふと、この國では逸早くモダンのヒュマニズムの必要を感じ、所謂「レアル・シユウレ」と云ふ制度を立てましたが、それでもパウルゼンなどの書いたものを讀むとレアル・シユウレは必ずしも、ギリシヤ・ラテンの如き古典の教育を全廢したのではない。その必要は依然として存在すると云つて居ります。イギリス、アメリカの事は知りませんが、それらの諸國にも必ずや、古典的ヒュマニズム、現代的ヒュマニズムの議論と選擇とが行はれて居るだらうと思ひます。そして是等の問題は必ずしも既に解決したのでなく、現在でも依然として研究されてゐるやうであります。

それで、極く内輪に見積つても、かういふ事が言へるのではないかと思ひます。一國の道徳、品性、傳承、風俗、更に學問、精神をよく保つ爲めには、少くとも國民の一部に於て古學の研究が斷えず旺んに行はれてゐなければならぬと云ふことは、破る可からざる原則であります。ところが古學といふものは、何處の國でも困難な言語と關係して居ります。例へば、歐羅巴に於てはギリシヤ語、ラテン語であります。殊に我國に在つて

厄介な事は、その困難な一言語が、一層困難な文字と宿命的に不可離に結合してゐる事であります。それにも拘らず、この講究、習得を廢したら、一國の精神は立ちどころに下落して、其國民をして、植民地的、功利的の國民とならしめてしまふのであります。

かういふ事は明治年代に既に論ぜられましたが殊に明治三十三年に西村茂樹氏は同じ意見を述べて居ります。少し長いけれども引用して見ませう。「又世の漢字排斥論者は漢字を論ずる毎に其害のみを論じて其利を論ぜず。今漢字が本邦の爲に宏益をなしたる一、二を擧ぐれば、第一元來本邦には文字なかりしを以て只傳説を以て語り傳へしのみなりしが、漢字の入りしより、是を文字に現はすことを得て始めて古事記以下の著述あり。第二本邦は言語甚だ貧しくして十分に人意を達すること能はず……漢字の助けあるに依つて是等の別々の意を了解するを得るなり」。「我邦の古書は此くの如し、支那の書は如何せんとするや。支那の書を讀むに及ばずと言はんか、是亦妄論にして……(寫字不明)、我邦の漢學は西洋の希臘拉典の學を廢せざると同じく、本邦にて漢學を廢すること能はざるべし。少くとも六經諸子及び歴史の大略は之を學ばざるべからず——」。當時と現代とはいろいろの事情が違ひませうが、然し今に於てもやはり同じ事はいへると思ひます。手近い例をとつて見ると、今我々は日支事件といふ大事件に直面して居りますが、さて其後に來るものは何か。國家の文化及び道德の顯揚であります。

その時に至つて古學の必要を痛感する事は火を見るよりも明であります。近頃外務省の或る人々より出された聲明が朝日新聞の投書欄あたりの投書家から非難せられるやうでは心許ない。個人の場合と同じく、國家に於ても、其行爲の根元になる所のものは道徳であります。

その道徳は「之を中外に施して悖らず」でありまして、かの教育を宗教から獨立せしめた Jules Ferry の「それはあなたがたの道徳です。また我々の道徳です。唯一無二のものです」と云つたフランス道徳のその原則には我々も同意することが出来るのであります。そしてこの道徳を明にするのには、モダンのヒュマニテイのみでは十分ではないのであります。亦古今に通じて誤らざるものでなければならぬのであります。

それに就いて好い例があります。滿洲奉天の圖書館のかたから四五年前の事、私が奉天に往つた時に聞いたことであります。今迄閑散であつた奉天の圖書館が、滿洲事變のあと急に閲覽人で賑かになつたさうであります。その大部分はわかい士官達で、どんな本を借りて讀むかと云ふと、それは孔子、孟子であつた相であります。さうして王道主義が急にわかい人たちの間に喧傳せられ、論議せられたのであります。此事が本當であるとしたら、漢字、漢學は既に用の終つた道具であるといふ事は申されないのであります。今度の日支事變は、滿洲事變に較べると遙かに大事であります。われわれの理想

を闡明する爲めには古學は是非必要で夙くに用意して置かなければならないと思ひます。殊に今度の事變のあと、わが國では恐らくは支那の古典のみでは足らず、歐羅巴の古典的ヒュマニテイをも必要とするやうになるのでありませう。そしてそれらの事をば誰がするかと云ふと、それは學者及び大學生が主になつてやるべき事であります。是等の人々は一國の選良でありまして、これらの人々が乏しいヒュマニテイの知識を持つて居てはならないのであります。そして馬がつけてくれた道をあとから歩むやうに現代の民衆の用ゐる訛つた口語を追つて、その音便を寫音の字で現すことのみを以て、之を國語の眞髓だと思ひ誤つてはいけないのであります。馬に乗る術に熟せない人は馬に導かれます。ヒュマニテイに就いて潜思しない人は能率主義、功利主義に引ずりまはされるのであります。そして其ヒュマニテイはさつき申したやうに、モダンのヒュマニテイばかりではいけない。古典的のヒュマニテイが大いに重要なのであります。別言すれば言葉といふものは唯現在生きてゐる同志が思想を交換するだけの用に使はれるものでなく、それにも劣らず、必要な過去の人道家との會話の手段であるのであります。次にロオマ字を用ゐることによつて果たして純粹の日本語が分化して豊饒になると云ふ事であります。ロオマ字論者は一も二もなく、この豫想を肯定して居りますが、それは甚だ疑はしいことでもあります。この疑を秩序立つて申すことは他の機會に譲り

まして、わたくしは、それは出来ない相談だといふ推断のみを述べて置きます。ロオマ字の便利を説くロオマ字論者は、自分が漢系語で教育せられ、それを利用して、ロオマ字書きを理解してゐると云ふことを忘れてゐるやうに見えます。ロオマ字を讀んだ時に、これは専門家の研究に待たなければなりません、脳髓のどこかにまづ漢字のイメエジが現はれ然るのちに始めてロオマ字の示す意味を理解するのではないかと考へるのがあります。

またロオマ字論者は「言葉直し」と云ふことを主張して居りますが、これは實は言葉直しではなく、極く不完全な新造語運動であるといふことは、嘗てある機會に述べたことがあります。言葉といふものは黴菌やヒドラ蟲の様に、一つの種子から新しいものが無限に生れて行くことは出来ません。それが殖えるときには是非ヘテロジエンのもが入つて來ます。其爲めには、日本に於ては從來漢系語が非常に役に立つたのであります。日本語は英語と似てゐる所があつて、このヘテロジエンの言葉を造作なく吸収することが出来ます。フランス語は英語のやうに融通がききませんし、それにアカデミイフランセエズといふ關門があつて、之を制限しますから、言葉を殖す爲めにはギリシヤ、ラテン等の古語から轉用するのであります。それでフランスではギリシヤ、ラテン語といふものは最早用のない死語ではなく言葉の分化の爲めの必要な母胎であります。

日本語に於ては、それでもとは漢語をこの言葉の分化の母胎としたのであります。といふのは、ロオマ字論者の所謂「純粹の日本語」(この概念は實證的のものではなく、觀念的のものであります)は甚だ数が少く、それから新語を分化せしめることは到底不可能だつたのであります。

即ち、次にかう云ふ推斷が下されると思ひます。ロオマ字運動は(漢系語に代へて)現代の歐米語を取り入れる方法の準備である。

言葉といふものはさう自由に新造することの出来るものではありませんから、今までの日本語から漢系語を除いてしまつたとすると、そのあとに生ずる空虚が急に「純粹の日本語」及びそれからの新造語で埋まるものではなく、随つて新に生ずることは現代外國語をそのまま、或は少し變更して取り入れるといふことでもあります。もしそれもいやだといふと日本の文化の進歩向上は一時休憩しなければならぬことになります。この現代外國語をそのまま取り入れるといふことは、自然科学の論文などでは現在既にやつてゐることでもあります。醫學の論文など見ると直ぐ氣の付くことでもあります。殊に横書きになつたといふ事は比の傾向に拍車をかけたことでもあります。日本語で十分足りる所をさへ横文字にして平氣である。第一號とか一番目とかいふ所をNo.1と書きます。四月十日を10. IVといふやうに書きます。横書の場合には實際漢字は不便で仕様がな

い。それで英語なりドイツ語なりの混用が段々と殖えて来る。ロオマ字書きにしたなら、この傾向は一層強くなるでせうと思ひます。即ち時枝誠之氏の「ネオ・ジャパニイズ」の提唱となるのであります。これらは畢竟英語を日本語としようと言つた森有禮氏の亡靈の鼓舞する所であります。

さて、それなら漢系語の代りに現代外國語を入れた新日本語が出来たら其結果はどうなるかと云ふ事であります。具象的な事物の名稱、簡単な概念の如きは外國語を籍りて之を現はしても何等面倒な事はない。「シヤボン」、「シヤツポ」、「ベエスポオル」……唯、それだけのことであります。然し思想的の言葉になりますと、その個々の語彙は決して獨立したものではなく、或る體系を構成する一部であります。例へば研究者の見所は同じでも、或る病理的變化をドイツ語で書くのとフランス語で書くのと、その書き現はし方が餘程違つて來ます。それぞれの學派の系統に左右せられるからであります。また油繪具でかかれた日本の風景、人物は、我々が日常見るところと、かなり違つてゐる事にお氣が附くでせう。それは油繪の畫家がヨオロッパの最近の流行に影響せられるからであります。別言すれば油繪具にヨオロッパの風土、文化へのトロピヌムが有つて、それが外へ現はれるのであります。文字や言葉は、油繪具以上の生きものでありまして、多くのヨオロッパ語を籍りるといふことは思索の方法——廣くいふと、ヒユマニ

テイの種類の上にヨオロッパ的——或はドイツ的、イギリス的、フランス的、ロシヤ的——のものに引つぱつてゆかれるといふことになるのであります。固より昔、漢字の使用によつて漢文化、漢道德に引つぱつてゆかれたのであります。然し千年二千年の陶冶により、それが完全に我國の文化、道德、思想の道具になつてしまつたのであります。これが即ち古典的ヒュマニズムといふものの重要性であります。

即ち、この事は單に便宜主義、能率主義の問題に止らず、果して我々は東洋的古典の精神——假にわたくしが「東洋的ヒュマニテイ」と申したところから離れて、西洋的ヒュマニテイに就くべきかといふ根本問題になるので、先づこの詮議を完全にした上でないと、いきなり能率主義から出發した議論は偏見になるといふのであります。

これで大體わたくしの申上げようと思ふことは終つたのですが、最後に一寸言ひたい事は、ロオマ字、假名を以て國字としようといふ人々の説には、往々一種の利己主義が隠されてゐることあります。即ち自分達は漢學といふもので此處まで到達して來た。併し乍らお前達はもつとやさしいものでやつて行け、とかういふのなら、それは甘やかしてなければ利己主義である。自分たちは艱難もしたが、醍醐味も嘗めた。今後の人にはそれをさせまいといふのである。

今までの漢字、漢系語は捨て去りそして實用的の現代外國語を少しばかり容れて、それで中學生を教育し或者をばそのまま大學まで送り入れるといふことになると、次の時代をして「故郷なき人々」の集團たらしめる恐れがあります。既に其萌芽は現代に於て見られます。一國民をして悉く植民地的の人種たらしむるやり方が今の教育に見えて居ないでせうか。

それならば古典は現代語の翻譯で間に合ふかといふと、残念ながらそれは間に合はないのであります。ちやうどロオプを持つて困難して山に登り、夜は火を焚いて宿し、朝は星を見て靈氣を吸ふことにより山の精神が理解せられるやうに、むづかしい言葉の習得と、古註の厄介な研究とによつて始めて古典の精神に參通するを得るのであります。即ち一見能率主義と反對なことがヒュマニテイには役立つのであります。いきなり外科の手術を習はないで、まづ解剖學を習ふやうなものであります。

畢竟するに日本の精神を興すのには日本現代の文學と自然科學とだけでは不十分で、現代に於てはあまりに自然科學偏重の弊害が見られて居ります。

然らばなぜ古典的のヒュマニテイが必要かといふと、それは古典といふものは決して死物ではないからであります。それはいき物であるのであります。

これで想ひ出しますのは、數年前わたくしが滿洲へ參りました時に、鄭總理にお目に

かかることが出来ました。その息子さんの非常によく日本語の出来る方が通譯をして下さったので、我々の意志は互に誤解なく通じたのであります。その時わたくしはかうして滿洲國が成立した以上は、啻に目先の利害の問題ばかりにかまける事なく、一方に新しいメトヂツクを以て支那の古典を研究することを、この國の重要な仕事として貰ひたいと申したのです。かういふ事を漢學者がいへば當り前ですが、我々は乏しい乍ら自然科学の事をやつてゐる人間で、かういふ事をいふのだから特に考へて下さいといふとその返事に「何も支那の古學を研究するに態々ヨオロッパの哲學や、そのメトヂツクを應用してやらなくても可い。新しい人が古典を讀めば新しい解釋が出来て、それが新時代の役に立つのだ」と、いふ意味のことをおつしやりました。この御返事にわたくしは大いに感服しました。之れについて思ひ出す事は、アナトオル・フランスの小説に「吾人はイリヤツド、或は神曲の一行をもその初め考へられた通りの意味で解しはしない。生きるといふ事は變化する事である。そして記述せられた、我々の思想の來世の生活も亦この法則から脱却する事は出来ない」。即ち良い古典は又人の代と共に更生するものであります。かつてフランスの議會に於いてヒュマニズムの問題が論ぜられた時にブラツクといふギリシヤ學者、此人はかなり左黨の議員でありましたが、大にギリシヤ語庇護の討論をいたしました。そのうちの一節に古學といふものは神話にあるア

ンテオスの様なものであるといふのがあります。アンテオスの足は一度地に着けば又力を恢復する。古代の文化、古典といふものはアンテオスに對する地面の様なもので、國家或は民族が衰へた時、一度古典に觸れば力を得る。それで此事をルネサンスとも、レナワシオンとも、レジエネラシオンともいふのであります。古典といふものの中には、之れ丈の力があるのであつて、過去は決して過ぎ去つたものでなく、背中の方に廻つた未來だと考へることが出來ます。

かういふ意味に於て、先刻内論に計算して申しましたが少くとも國民の中の一部分は否でも應でも古典、日本ならば古事記、萬葉等の日本の古典の外に古漢籍を學ぶ必要があります。それは専門の人に委せて置けばよいと言はれるかも知れませんが、専門家に任せておいては、古學はアンテオスの地面にならない。即ちシユツツコロイドといふ様に周圍に保護する環境がなければ、裸の醜態は墮ちてしまひます。そして學者とか大學生がその擁護者にならなければならないのであります。高等學校を入學試験の準備學校たらしめず、ヒュマニテイの道場たらしめる必要があります。少くとも大學生に向つて、千九百字の漢字で用を足せといふのは間違つた方針であります。

以上は、多少わたくしの嗜好も入つては居ませうが、成る可く公平に、且つ理詰めに考へた議論だと思つて居ります。醫學の術語の改定といふやうな問題には直接役に立

國字國語改良問題に對する管見

たぬ議論であつたかも知れぬと恐縮に存じますが、あまりに便宜主義的な、通俗的な立場のみからして、言葉でも、術語でも、性急に改革しようといふ努力は、下手にすると利益より不利益を齎らす恐があると存じます。少し柄に無い事を長々と申上げまして、皆さんの御審判を願ふ次第であります。(國語協會醫學部第三回例會講演)